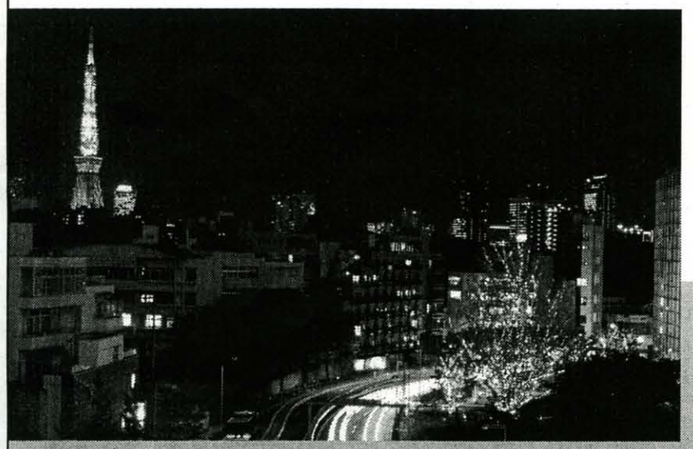
Christmas at Tokyo2005

広告特集

東京と向き合うクリスマス



僕は仕事柄、個性的な作り手にお会いする機会には事欠かないが、アートディレクターの水谷孝次さんはその中でも屈指の〈変わり者〉だ。世界中を旅して、人々の笑顔を写真に撮りためては集積して展覧会を開いている。それは『メリープロジェクト』といい、今や世界各国で評価されているのだ。『愛・地球博』の「愛・地球広場」巨大スクリーンで二十三カ国、約二万人分のはじける笑顔が流され続けたので、目にした人も多いだろう。

デザイン業で築いた名声と仕事はそっちのけで、今もカメラを手に日々、人々の幸せな笑顔の瞬間を希望のシンボルとして収集し続けている。昨年のクリスマスはその撮影旅行中、リオデジャネイロの下町で過ごしたというが、笑顔ウオッチの旅を重ねるたび「負の遺産を抱えた貧しい街に生きている子どもたちほど、笑顔が輝いている」と悟った。逆に東京の子どもたちの笑顔にはいかにも輝きがない、とファインダー越しに実感するらしい。

僕たちは本当に純粋な笑顔を浮かべられるだろうか。水谷さんの話を聞いて気がかりになった。ディケンズ少年のように、人生の深い真理をつかむために、いちいち生活の苦難を味わうことは願い下げかも知れないが、色んな階層や職業、立場の人々の内なる思いに対して、想像力豊かでいたいものだと思う。労せずして得をする風潮が蔓延し始めている今こそ、それは大切なことだろう。ディケンズの体験に養われた寓話が示唆するものは、なお壮大だ。

では東京の表情は今、笑顔なのか。六本木で汐留で、秋葉原で、そこかしこで街が急激に変わりつつあるこの時、東京と向き合うクリスマスを迎えたい。この街は今、どんな顔つきをしているか、澄んだ目をしているのか、何かにおびえていないか、海外から訪れる人々にも、その笑みは伝わっているだろうか。未来に胸を張れる東京へ向けて、健やかな寝顔をしているのか――。

「建築は凝固せる音楽だ」とは詩人ゲーテの説である。とすれば、さながら都市とはライブで聴ける巨大なシンフォニーとも言える。天に向かって競うように伸び始めたいくつもの摩天楼の、その影に隠れた下町の古い路地裏のささやきにまで耳をそばだて、街の皺一本ずつをも愛おしいと慈しめる心を持ちたい。一度はバブルを味わった我々が、「失われた十年」の辛酸をなめて、そこからようやく抜け出たような思いがするこの師走こそ、しばし街の表情を思いやる感受性、贅沢な時間を持ちたいと思うのだ。

文／金子 義則
（アートキュレイター、エディター）